

１ 目指す学校像

６年間の計画的・継続的な教育活動により、生徒一人ひとりが自己の夢や目標を実現し、地域から揺るぎない信頼感のある学校

２ 本年度の教育目標

(1) 自分のこと、地域のこと、自分と地域の将来のことを語れる生徒の育成 (2) 学ぶ意欲と挑戦する気持ちを持ち、自分を高められる生徒の育成 (3) 規範や規律を意識し、基本的な生活習慣が身についた生徒の育成 (4) 故郷や自然、仲間を大切にし、つながる意識を持つ生徒の育成
--

３ 評 価

項目	昨年度の課題	本年度の目標	目標達成のための手だて	自 己 評 価	学校関係者評価	今後の課題
学 ぶ	○生徒の多様化に応じた授業法、規律の確立 ○高１、２の基礎学力の伸長 ○センター試験に対応できる学力の育成 ○自分のこと、地域のことを語れる表現力の育成 ○学びの意味をつたえられる授業を実践する必要 ○思考力の育成	○オリエンテーション等を通じ、高等学校の学習の仕方を理解し、意欲をもつ。 ○家庭学習時間を増やすことと、内容を充実させること。 ○補習や模試へ積極的に参加する。 ○進路決定に必要な学力や自己表現力を身につける。 ○教職員による客観的、戦略的な学力分析ができる。 ○学力観の変遷に適応できる授業改善	○効果的な教科、分掌のオリエンテーションの実施による円滑な学習への意欲 ○スタディー・サポート（業者テスト）を利用した生徒の生活調査と学力レベルの把握 ○大学進学開放講座の積極的な参加 ○保護者面談、三者面談を通じた生徒理解と、的確な進路指導 ○なかこうセミナー、センター・リアルチャレンジなどの進路関係行事による積極性の育成 ○進学検討会の実践的運用 ○学力の向上のため効果のある習熟度別クラス、コース等の研究 ○授業改善を目的とした校内研修の実施	①進路 ○学力分析 １年生・・・数学・英語で学力の向上が見られた。 ２年生・・・学力上位層と下位層との差が開き２極化が進んだ。 ３年生・・・推薦１で国公立大の合格者数を増やすことができた。 ○家庭学習習慣の定着 上位・中位層の家庭学習は定着しつつあるが、下位生徒の改善に問題がある。 ①今年度の新たな取り組み：模試（高３）・スタディーサポート（高１、２）の成績が、家庭学習時間に比例するグラフを生徒に示し家庭学習の必要性を示した。 ②改善が進まない原因：部活優先で家庭学習が確保できない生徒（１年生→２４％、２年生→３２％） 部活動時間について検討する必要がある。 ○大学進学講座の出席率の改善 進学講座の出席を校内推薦基準に加え（欠席生徒→1/3に減少）、学力向上につながった。 ○進路意識を高める指導 ２年生へ進路希望書（内容：保護者の考え、試験科目等）の提出と、進路指導部との面談を実施することで、２年生の進路意識を高めることができた。また、高校１・２年生、保護者、教員対象に同一講師による講演会を実施した。 ○高校３年生の最終結果：【就職】公務員６名、民間企業２名 【進学】私立４年制大学のべ１５１名、国公立４年制大学２３名、短期大学７名、専門学校３２名（３年生１８０名、３月９日現在） ②１年団 ○なかこうセミナーを全員参加にすることで、進路への意欲喚起が図れた。職業講演会に加え年３回の進路講演を行い、学習指導を支援することができたと考えている。 ③教頭 ○授業改善をテーマとした本校教員によるパネルディスカッションを実施。	・進路講演会は非常に好評であった。来年度は、ＰＴＡ総会等での講演も検討して欲しい。 ・なかこうセミナーは、多忙な教員の進路指導への一助にもなり、内容も進路意識を高められる。継続すれば、地域への関心も高まるのではないか。 ・入試状況や卒業式の雰囲気を見ても、非常に頑張っているが、小学校の保護者からは、中学から県中に行くべきか、市立や私立に行かせるべきかという声もある。 ・県中からの６年間で進路を考えていけるのは良い。 ・教育目標をどのように、生徒に伝えていくかが課題。	・部活動をいわずに、限られた時間の使い方を意識させる、メリハリのある生活習慣の徹底 ・家庭学習時間の足りていないものを、どのように主体的に学習させることができるかという視点での教科指導 ・授業への信頼感を基にした授業規律の徹底 ・学びの意味を伝えるＬＨや教科指導のありかた ・２年次での進路希望書をもとにした進路検討会のありかた ・６年後のセンター試験にかわる新しい入試方法の研究と対策
自 立 す る	○基本的生活習慣の確立と、ルールやマナーを守る精神のいっそうの育成 ○学校行事を通じた生徒意識の一体化及び運営技量の向上 ○部活動への主体的な取り組みと成績の向上 ○ボランティア活動への積極的な参加 ○地域や警察と連携した交通安全指導	○オリエンテーションや集会等を通じルールやマナーの徹底を図る。 ○安定した生活リズムができ、心身ともに活動的な学校生活を送ることができる。 ○学校行事の運営、参加を積極的に行う。 ○部活動や生徒会、ボランティア等に積極的に参加し、活動する。 ○交通安全活動の充実、徹底を図る。 ○講演等を通じ社会の一員としての意識を高める。 ○SNS等への啓発	○オリエンテーションや集会による入学時指導の徹底 ○昇降口指導、該当指導の徹底 ○交通安全講習会、制服着こなし講座、非行防止教室等の実施 ○体育祭、文化部発表会への取り組み ○生徒会活動の充実 ○家庭クラブ活動の充実 ○部活動の充実 ○SNS講習会	①学年団 ○１年団：全体として落ち着いた状態で学校生活を送ることができている。体育祭やなかこう祭、ホームデーでは主体的に活動することができた。 ○２年団：ボランティア活動の参加や学校行事を通じた生徒意識の一体化については問題ないが、ルールやマナーを守る精神の育成には課題が残る。 ○３年団：学校行事を成功させようとするクラス内での役割や、各自の進路実現のための取り組みのなかで、徐々に成長する姿が見られた。 ②生徒指導部 ○昨年度同様、問題行動の件数は減少傾向にある。 ○自転車のマナーについての地域からの苦情、指導件数は変わらず多い。 ○部活動：四国大会出場→柔道、水泳、ソフトテニス、陸上 全国大会出場→柔道、ソフトテニス、陸上、将棋、美術 ③教頭 ○２学期末出席状況統計：平成２５年度と比べ全体で欠席率が下がっている（１年生：１.６６％→１.１７％ ２年生１.４１％→１.１５％ ３年生 １.６７％→１.２９％）が、遅刻や早退の数は２％以下の水準でほぼ横ばい。 ○学校行事：体育祭および文化祭の同時期開催は、日程的には大変だったが、生徒の達成感および一体感が高まった。生徒による主体的な活動場面をより増やす必要がある。	・ウルトラマラソンのボランティアも過去よりは増えている。 ・毎年の文化祭実施についての意見は？ →３年生はやはりきつかった。 ・体育祭は３年連続となりしっかり出来ていた。	・服装等の校則を守らせるための教職員の一致した取り組み ・生徒による学校行事の運営をととした主体的な行動力の育成 ・部活動の活性化によるリーダー育成
つ な が る	○自分のよさを知っている生徒、自分のことについて語れる生徒を育てる。 ○生徒に対するきめ細やかな配慮を組織的に行い、必要が認められる場合には、速やかに教育相談部や他機関と連携し、問題を重症化させない。 ○郷土への思いや、地域の一員としての意識を育て、諸活動に積極的に貢献する。 ○客観的なデータや、外部の方々のご意見を学校改善に活かす。	○ホームルーム活動、部活動を通じて自分の居場所を見つける。 ○ボランティア活動等に積極的に参加する。 ○地域の一員としての意識を育て、地域の活動に貢献できる。 ○防災について自主的に考え、行動することができる。 ○ピア・チューター活動を奨励し、中高一貫の利点を活かす。 ○朝ブレ、総合的な学習の時間の活動を系統化し、課題解決能力の育成を目指す。 ○Ｑ－ＵやＲＶシートを用いた生徒理解、生徒指導を実践する。 ○人権課題についての教員研修を充実させる。 ○サポート委員会を立ち上げ、支援体制の確立、情報共有に努める。 ○OPTA活動、同窓会活動を活性化し、地域とのつながりを学校としても大切にする。 ○学校評価アンケートを学校改善に活かす。	○ボランティアや地域貢献活動への参加生徒の増加 ○部活動生徒の地域貢献活動への積極的参加 ○部活動の活躍（全国大会出場を目指す部活動を増やす。） ○防災講演会の実施 ○月に１回心の教育センターからの支援を得たサポート準備委員会及びサポート委員会の実施 ○朝ブレや「総合的な学習の時間」の内容についての整理 ○Ｑ－ＵやＲＶシート利用についての校内研修の実施 ○学校行事へのＰ参加をうながし、活性化の端緒とする。 ○学校評価アンケートの内容を改編し、学校改善に役立てる。	①教頭 ○地域活動への参画：従来の音楽部・書道部に加え、他クラブ（演劇部や漫画研究部等）の活動も増えた。 ○地域活性化や地域との連携に関する学校評価アンケート：生徒、教職員ともにそれぞれ６.３％、１１.８％向上した。来年度以降も、地域への参画意識を高める取り組みを行いたい。 ②教育相談部 ○月１回定例化の生徒サポート委員会は年間計画通り実施でき、予防の観点からの生徒把握、職員への周知ともに役立てることができた。保健室の利用も上がり、心に痛みを抱えた生徒への対応も一定できるようになり、学校全体で組織的に取り組むことができるようになった。 しかし、生徒指導や教育相談（生徒支援）などの協力体制については、連携不足の面があり、更なる強化を目指し取り組みたい。また、「ともにある」意識を生徒、教職員の全員で共有できるような機会を多く持ちたい	・地域の活動に参加することで、関心が高まると思う ・幡多全体を考えられるのは、中村高校の良いところである。 ・今後は、高校別にいうのではなく幡多の学校全体で、地域活動への意識を高めることも必要。 ・中学校と高校の連携はどのように行っているか。 ・部活顧問と保護者のつながりの深さを、それ以外のつながりにいかせられないか。（同窓会やＰＴＡ活動等の横のつながり）	・生徒個々の変化に対する教員の察知力向上と、情報共有による組織的対応 ・ホーム主任のホーム指導力向上（面談力の育成） ・地域の問題を自分の将来とあわせて、考えることによる公的な自己実現意欲の高まり ・中村高校への帰属意識向上